

千金方における疊字についての考察

松岡尚則¹⁾・山下幸一²⁾・村崎徹³⁾

1) 高知大学医学部腫瘍局所制御学

2) 高知大学医学部麻酔・救急・災害医学

3) 神戸大学大学院医学系研究科環境応答医学講座環境医学分野

〔要旨〕現在、世に広まっている千金方は、北宋の一〇六六年に校正医書局が統一・改訂して刊行された宋改本といわれるものである。これに対して、宋改を経ない千金方には、『千金方遺唐使将来本』、『新雕孫真人千金方』、イギリスの『スタイン本』、ロシアの『コズロフ本』の4系統が知られている。これらにおける疊字を調査した。「々」(ノマ點)は室町期の文献には既にその使用例が見られ、日本製の疊字である。『遺唐使将来本』では、ノマ點と二の點の二種類の疊字が使用されていた。『遺唐使将来本』は、建治三年(一一七七)の和氣仲景抄本で校訂され、永正から天正三年(一五七五)まで和氣(半井)家にあつて伝承・抄写されてきたという『遺唐使将来本』の巻末の識語と、疊字の使用は矛盾せず、『遺唐使将来本』の巻末の識語が正しいものであることをさらに示唆された。また、カナ部分に使用されていた疊字を考察し、このカナは、鎌倉中後期から室町初期のものであると考えられた。『新雕孫真人千金方』、『コズロフ本』では同じ文字を繰り返すか、二の點を用いていた。『スタイン本』では同じ文字を繰り返す文の部分が含まれていなかった。

キーワード——千金方、疊字、遺唐使将来本、新雕孫真人千金方、スタイン本、コズロフ本

【緒言】

千金方は、唐代七世紀中葉に孫思邈が編纂し、その後、北宋の一〇六六年に校正医書局が統一・改訂して初刊行したが、現在の流布本は宋改による大規模な改訂のため、唐代のもともとの姿を失っている。宋改を経っていない千金方には、『千金方遺唐使将来本』、『新雕孫真人千金方』、イギリスの『スタイン本』、ロシアの『コズロフ本』の四系統があることが知られている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。それぞれの本は、同じ様に宋改を経っていないが、それぞれの本の文字に多くの合致を認めるものの、詳細な点で差異を認める。今回、我々は、この差異のうち、疊字を中心に考察した。

【方法】

『遺唐使将来本』、『新雕孫真人千金方』、イギリスの『スタイン本』、ロシアの『コズロフ本』をそれぞれ比較し、疊字を使用しているかどうかを調査した。『遺唐使将来本』は、宮内庁書陵部（五五八函九号、複一四四一八）を使用した。

また、『遺唐使将来本』と『小品方』と同じ内容が引用されている部分を比較した。

【結果】

『遺唐使将来本』（図1）において、「三」及び「々」の二種類の疊字が使用されていた。『遺唐使将来本』で「々」の字を用いられた所は『新雕孫真人千金方』（図2）では、同じ文字を繰り返して文が書かれていた。また、二の點の使用も見られた。イギリスの『スタイン本』（図3）では、疊字を使用するような文章は含まれていなかった。ロシアの『コズロフ本』（図4）では、同じ文字を繰り返す部分と、疊字としては二の點を使用していた。

「遣唐使将来本」のカナ中の置字には、「く」、「ノ」が使用されていた。(図5)「小品方」と「遣唐使将来本」が引用した同じ文章を比較する(図6)と、「小品方」では、二の點を使用しているのに対し、「遣唐使将来本」では、一つの文章にノマ點と二の點の両方が用いられていた。

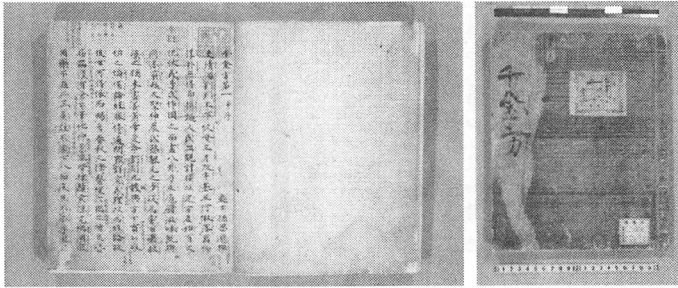


図1 『千金方—遣唐使将来本』

室町鈔本といわれる。

巻末に多数の識語があり、それらより正和四年(1315)の和氣嗣成手抄本に基づき、建治三年(1277)の和氣仲景抄本で校訂され、永正から天正三年(1575)まで和氣(半井)家であって伝承・抄写されてきたとされる。現在は、宮内庁書陵部に所蔵(五五八函九号)されている。

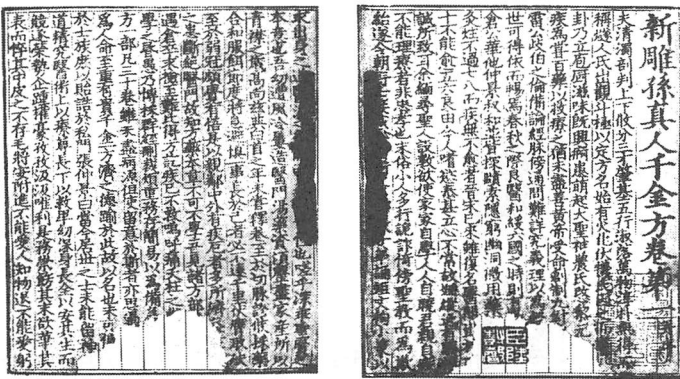


図2 『新雕孫真人千金方』

三菱財閥二代目岩崎弥之助が陸樹藩より購入し静嘉堂文库に収められている。この文中では同じ文字を繰り返すか、繰り返し文を使用するか、または二の點が用いられていた。



図4 『コズロフ本』

1907～08年、ロシアのコズロフもカラホトで大量の文献遺物を発掘した。そのうち、『コズロフ本』はサンクトペテルベルグの東方学研究所に収められている。この文中では同じ文字を繰り返すか、繰り返し文を使用するか、または二の點が用いられていた。

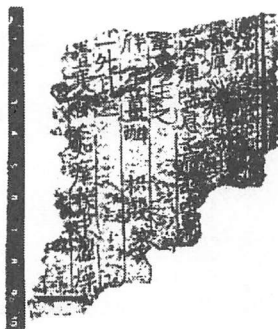


図3 『スタイン本』

イギリスのスタインは1917年流沙に埋没したカラホトにて多数の文献遺物を発掘した。そのうちスタイン本は大英図書館の KK.2..0285.6.iv として収められている。この文中では、同じ文字を繰り返す文の部分が含まれていなかった。

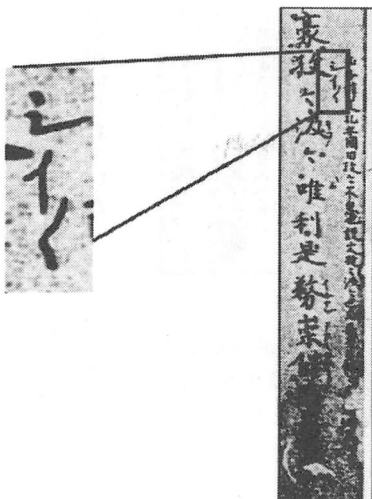
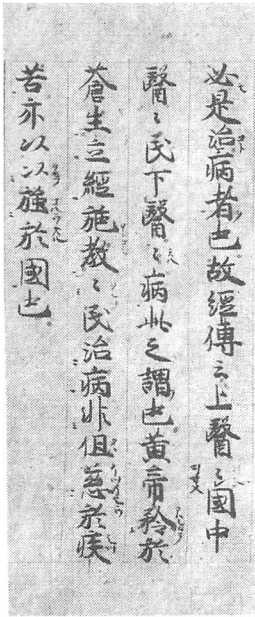
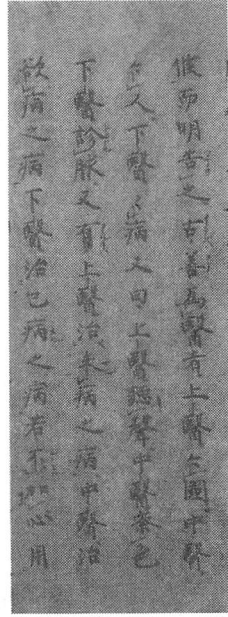


図5 『千金方』—遣唐使将来本のカナ中の量字には、「く」、「ノ」が使用されていた。「く」の量字は、起筆部の位置が二字のカナの下字の右傍よりやや下方で起こっている。遣唐使将来本のカナは墨書で書かれており、ラコト点は朱書で示される「朱墨両点」の体裁がとられている。



『小品方』



『千金方』一遣唐使将来本

図 6 同じ引用から取られた文。

『小品方』では、二の點を使用しているのに対し、遣唐使将来本では、一つの文章にノマ點と二の點の両方が用いられていた。『小品方』では「民」の字を用いているのに対し、「民」の字が避忌として使用を避けられているため、千金方では「人」の字を用いている。

【考察】

「々」、「、」、「く」、「、」、「三」は、疊字、繰り返し符号、反復符、踊り字、かさね字、反覆音符など様々に呼ばれている。JIS規格上は、「IDEOGRAPHIC ITERATION MARK」が正式な名前として『JIS X 0208 : 1997』に規定されている。この論文中では、疊字と言う用語を使用した。⁽⁶⁾⁽⁹⁾⁽¹¹⁾⁽¹³⁾疊字は、すでに、殷代には使用されていたことが、殷の金文中に読みとられることから判っている。⁽¹⁴⁾殷、周、漢、魏、晋、唐と疊字は多用されてきたが、通例「三」の字で利用されていた。⁽¹²⁾疊字である「々」の字は「仝」または「三」から、生じたという二つ説がある。「々」は、大阪大学文学部の岡島昭浩氏のページで、おどり字に関する文部省の通知（二十一年三月とあるが案で施行されなかったようである）の中に「同（どう）の字點」とある。「々」の字は、「仝」の字から変化したものと考えられているとある。⁽⁸⁾⁽⁹⁾同の字点以外の疊字は、今では手書きの文章ぐらいでしか目にしなくなっている。これは、同の字点以外はできるだけ使わないほうが望ましい、という文章表記法の基準が一九五〇年に文部省から出ているためとされる。⁽⁹⁾現在「々」という字が比較的多く使用されているにもかかわらず、清の時代に編纂された『康熙字典』⁽¹⁵⁾中には「々」という漢字は存在しておらず、また、「三」という漢字も存在していない。日本の辞典での扱いは、さまざまで、漢字として扱わないもの、⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾同一文字疊用の記号として記載しているものがある。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾漢字の反復に専ら使用される「々」は、中世後半期（室町期）の文献には既にその使用例が見られる。⁽²¹⁾⁽²²⁾

『遣唐使将来本』には巻末に多数の識語があり、それらより正和四年（一二二五）の和氣嗣成手抄本に基づき、建治三年（一二七八）の和氣仲景抄本で校訂され、永正から天正三年（一五七五）まで和氣（半井）家にあつて伝承・抄写されてきたと考えられている。⁽¹⁾⁽²⁰⁾⁽²³⁾また、千金方第一并序の部分に蔵書印「吉氏家蔵」の陰刻印記があるため、天正三年以降に吉田家へ所蔵が移つたと真柳は推測している。⁽¹⁾さらに文政年間（一八一八―一八二九）に書店の英

平吉の手をへて、多紀元堅が購入をし、現在は、聿修堂（江戸医学館）から宮内庁書陵部に所蔵が移っている。また、天保三年（一八三二）には『真本千金方』の名が与えられ、松本幸彦の出資、多紀元堅の序により、オコト点までそっくりそのまま模刻された。⁽²⁴⁾

『遣唐使将来本』以外に日本で所蔵されている宋改を經ていない千金方には、『新雕孫真人千金方』がある。『新雕孫真人千金方』三〇巻は、巻一〜五・一一〜一五・二一〜三〇が南宋版で、その他は元明版で補配されている。一七九九年清の大蔵書家・黄丕烈が入手し、この宋版部分が宋改を經ていないことに最初に黄丕烈が気づいている。のち『新雕孫真人千金方』は清末四大蔵書家の一人である陸心源の蔵書となった。当時、清には江戸医学館本の覆宋版『千金方』が日本から輸入されており、その校勘記が引く遣唐使本系と『新雕孫真人千金方』の文字に多くの合致を認めた陸心源は、孫真人の真本と賞賛している。この書を陸心源の没後、他の蔵書とともに息子の陸樹藩より三菱財閥二代目の岩崎弥之助が購入し、明治四十年に静嘉堂文庫に収められ現在に至っている。⁽²⁵⁾したがって、南宋版の刊行で一七九九年まで清にあった『新雕孫真人千金方』ではノマ點の疊字は使用しておらず、同じ字を二度続けるか、繰り返して文を繰り返すか、一二の點を使用している。

一九〇七〜〇八年、ロシアのコズロフはカラホトで大量の文献遺物を発掘し、現在、サンクトペテルベルグの東方学研究所にこれらは保存されている。その中に『孫真人千金方』巻一三第二〇葉〜巻末第二四葉までと、巻一四第一葉の計六葉がある。⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾この『コズロフ本』の文章の中では同じ字を二度繰り返して使用しているか、二の點の疊字を使用している。

イギリスのスタインは一九一七年五月の第三次中央アジア探險の時、一一世紀に出現し一四世紀末に流沙に埋没したカラホト（今の内モンゴル額済納旗付近）で多数の文献遺物を発掘した。そのすべてが大英博物館と大英図書館に分蔵されている。⁽⁷⁾うち大英図書館の KK.2.0285.Giv は、静嘉堂の未宋改本『新雕孫真人千金方』と文字の位置

まで完全に合致し、卷一三第一四葉右下の一部だったことを小曾戸洋が発見している。この『スタイン本』の文中では、同じ文字を繰り返す文の部分が含まれていなかった。また、小曾戸洋は、コズロフとスタインの発掘した両残紙は同版本かつ同一本からの別れと推定している。⁽²⁰⁾この『コズロフ——スタイン本』の成立は、処方薬用量の度量衡数字より小曾戸洋は、南宋本から元にかけて出版された『新雕孫真人千金方』の翻刻本と鑑定している。⁽²⁰⁾これに対し、李継昌は、十一世紀から十三世紀初にかけての印本と推し、あるいは、西夏人が林億ら宋改以前の某版を底本として坊刻した版かと推測している。⁽²¹⁾したがって、南宋本から元にかけて出版されたまたは、十一世紀から十三世紀初にかけての印本と考えられている『コズロフ——スタイン本』ではノマ點の量字は使用していない。

「々」は室町時代の文献には既にその使用例が見られ、日本製の量字である。⁽²²⁾したがって、『新雕孫真人千金方』、『コズロフ——スタイン本』で、「々」の文字は見られないことは矛盾しない。『遣唐使将来本』では、ノマ點と二の點を量字として用いている。このことより、『遣唐使将来本』は、室町時代以降、日本人によって抄写されていることが判明した。

カナ部分に使用されていた量字には、「く」、「ノ」が使用されていた。「く」の量字は、起筆部の位置が二字のカナの下字の右傍よりやや下方で起こっている。小林芳規⁽¹³⁾によると二字量字では、時代によって起筆の位置が異なる。平安期は仮名二字の上下の右傍にあったといわれている。鎌倉前半期時代の二字量字では、初期の二、三の例外を除いて、一筆書きで起筆部の位置が二字の仮名の下字の右傍に移っている。鎌倉後半期に入ると、量字は、下字右傍の真ん中より下寄りの位置より起筆している。室町時代中期以降では、「く」の形態の量字を使用していない。⁽¹³⁾このことにより、カナ部分に使用されていた量字は鎌倉時代中後期から室町初期に書き込まれたことが考えられた。尚、『遣唐使将来本』のカナは墨書で書かれており、ヲコト点⁽¹⁴⁾は朱書で示されるいわゆる「朱墨両点」の体裁がとられていた。「朱墨両点」の体裁は仏家とは異なり、漢籍を伝授した博士家では、平安時代の様相を承継いで近世にお

よんでおり、⁽²⁵⁾ 疊字によって考えられた鎌倉時代中後期から室町初期の年代は矛盾しないと考えられた。

【総括】

『遣唐使将来本』、『新雕孫真人千金方』、『コズロフ本』と『スタイン本』を比較した。遣唐使将来本は、「々」というノマ點の疊字を使用しているが、『新雕孫真人千金方』、『コズロフ本』、『スタイン本』は使用していなかった。

『遣唐使将来本』には「々」という疊字を使用していることから、『遣唐使将来本』は、室町期以降、日本人によって抄写されていることが判明した。カナの疊字は、鎌倉時代中後期から室町時代初期に書き込まれたと考えられた。

建治三年(一二七七)の和氣仲景抄本で校訂され、永正から天正三年(一五七五)まで和氣(半井)家にあつて伝承・抄写されてきたという『遣唐使将来本』の巻末の識語と、「々」という疊字を使用は矛盾せず、『遣唐使将来本』の巻末の識語が正しいものであることをさらに示唆した。

本論文の要旨は第五六回日本東洋医学会総会(富山、二〇〇五年五月)にて報告した。

【謝辞】高知大学医学部医学科言語分析学 阿部眞司教授、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部 小曾戸洋先生に対しましては、ご教授・ご鞭撻いただき感謝致します。

文献

- (1) 真柳誠、他…目で見る漢方史料館(二〇八)——宮内庁書陵部所蔵の古鈔本『千金方』——遣唐使将来本による唐代旧態本、漢方の臨床、四四、五六二—六五四(一九九七)

- (2) 孫思邈：新雕孫真人千金方、オリエント出版社、大阪（一九八九）
- (3) 馬繼興：『敦煌吐魯番研究』第二集、中華書局、中華人民共和國（一九九七）
- (4) 馬繼興、他：敦煌文獻分類錄校叢刊敦煌醫藥文獻輯校、江蘇古籍出版、中華人民共和國（一九九八）
- (5) ЛИНЕНЬШИКОВ: ОПИСАНИЕ КИТАЙСКОЙ ЧАСТИ КОЛЛЕКЦИИ ИЗ ХАРАХОГО (ФОНД П. К. КОЗЛОВА), АКАДЕМИЯ НАУК СССР (1984)
- (6) 李繼昌：列寧格勒藏「孫真人千金方」殘卷考察、一一九—一二二、敦煌學輯刊（一九八八）
- (7) 真柳誠、他：目で見える漢方史料館（二一五）宋改を経ない『千金方』の古版本二種、漢方の臨床、四四、一五一—四一五、一六（一九九七）
- (8) <http://www.letosaka-u.ac.jp/~okajima/hyoki/odori/>
- (9) 広辞苑編集部質問箱 www.iwanamigo.jp/hensyu/jiten/jiten/kojen.html
- (10) 橋本進吉：文字及び假名遣の研究 二八九、岩波書店、東京（一九四九）
- (11) 中田祝夫：古點本の國語學的研究 總論篇 六〇五—六二五、大日本雄弁會講談社、東京（一九五四）
- (12) 阿辻哲次、他：何でもわかる漢字の知識百科 四三一、三省堂、東京（二〇〇二）
- (13) 小林芳規：踊字の沿革統紹、広島大学文学部紀要、二七—一（一九六七）
- (14) 水上静夫：漢字を語る 一八二—一九九、大修館書店、東京（一九九九）
- (15) 康熙帝：康熙字典、同文書局原版、香港中華書局、香港（一九五八）
- (16) 白川静：字通 平凡社、東京（一九九六）
- (17) 新村出：広辞苑 岩波書店、東京（一九九八）
- (18) 諸橋轍次：大漢和辞典 大修館書店、東京（一九五五）
- (19) 江守賢治：解説字体系典 三省堂、東京（一九九八）
- (20) 小曾戸洋：中国医学古典と日本—書誌と伝承、塙書房、東京（一九九六）
- (21) 大原望：和製漢 <http://member.nifty.ne.jp/TAB01645/ohara/index.htm>

- (22) 佐藤喜代治・漢字百科事典、明治書院、東京(一九九六)
- (23) 宮下三郎・日本にきた孫思邈、千金方研究資料集、オリエント出版、大阪(一九八九)
- (24) 松岡定庵・千金方葉註 付 真本千金方、医聖社、東京(一九八二)
- (25) 築島裕・日本語の世界 五 仮名、中央公論社、東京二四五―二五〇(一九八二)

The Ideographic Iteration Mark in Senkinho.

Takanori MATSUOKA, Koichi YAMASHITA, Toru MURASAKI

In the 7th century, Senkinho was written by Sonshibaku in the Tang dynasty China. This book that was altered in 1066 in the north Sung dynasty China has become known in the world now. However four series of books remained intact, as they were not modified. The names of each book were Senkinho Kentoushi-syouraibon, the Shincho-sonshinjin senkinho, Stein book, and the Kozlov book. Senkinho Kentoushi-syouraibon and Shincho-sonshinjin Senkinho are in Japan, while Stein and the Kozlov books are in the United Kingdom and Russia respectively. We researched the ideographic iteration marks in these books. In Senkinho Kentoushi-syouraibon, several ideographic iteration marks were used. But in Shincho-sonshinjin senkinho and the Kozlov book, only one ideographic iteration mark was used. Furthermore, there were two types of ideographic iteration marks in the Chinese character text of Senkinho Kentoushi-syouraibon. We estimated that the ideographic iteration marks in the Katakana character were transcribed between the middle era of Kamakura Japan and the early era of Muromachi Japan.